

滋賀県立琵琶湖文化館に、「竹生島詣勸進弁」という江戸時代末期の1846(弘化3)年に出版された本があります。

著者は京都・鳩居堂主人の熊谷蓮心。これまで注目されることのなかった文献ですが、日本人の琵琶湖観を考えるうえで実に興味深い内容です。

「琵琶湖愛」を叫ぶ元祖ともいべきこの本について、少し紐解いてみましょう。

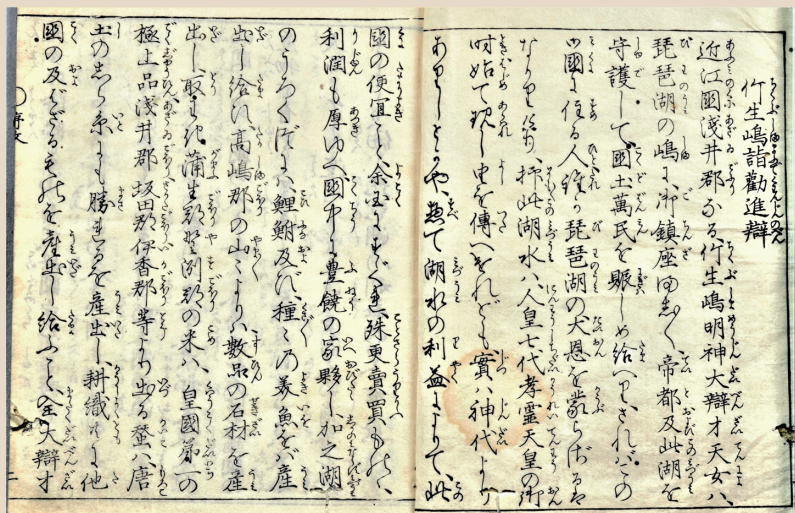
1. 幕末期に琵琶湖の恵みを力説

蓮心はまず、竹生島^{みづうじま}明神^{みょうじん}大弁才^{だいぶんさい}天女^{てんによ}が琵琶湖中の島に鎮座しており、帝都(京都)および湖を守護して、国土万民を賑しめていると説きます。ここで当然のように「琵琶湖」の名称を用いていますが、江戸時代にはまだ「琵琶湖」の名称が一般的ではなく、ふつうは「湖水」や「近江の湖」などと呼ば

れていました。明治に入って「琵琶湖汽船」「琵琶湖丸」「琵琶湖新聞」など琵琶湖を冠した名称が次々と現れ、呼称が定着したと考えられます。

そうした「琵琶湖」の名称史上、熊谷蓮心の「竹生島詣勸進弁」は幕末期に琵琶湖の呼称を述べた史料としてひとつの画期をなしています。748文字の文章中に、三回も「琵琶湖」(振り仮名はいずれも「びわのうみ」)の称が見えます。そもそも琵琶湖の名称は竹生島弁才天が奏でる楽器の琵琶に関係づけられて呼ばれたものです。江戸時代に竹生島信仰をもつ人々が「琵琶湖」の呼称を積極的に用い続けた結果それが広まり、明治期以降に固有名詞「琵琶湖」が定着したのかも知れません。

蓮心はこの御国、すなわち近江国に住む人はみな琵琶湖の大恩を蒙って



写真T-1 竹生島詣勸進弁(琵琶湖文化館蔵)

いるといえます。近江は他国に比べて豊富な産物に恵まれ豊饒の家が多いことについて、具体例を掲げます。鯉鮒などの湖水の魚類、高島郡の石材（比良石、硯石などを指すか）、「皇国第一の極上品」である蒲生・野洲郡の米、中国産の上質生糸（白糸）にも勝る浅井・坂田・伊香郡の蚕糸（^リぎ^ゃ）を挙げて、それらの産物は湖水の利益、ひいては弁才天女による近江守護の賜物であるから、竹生島の神恩を喜び奉るべきであるということです。近江の産物についての正確な知識、かつその品質についての高い評価が目立ちます。そして、それらをすべて琵琶湖の恵みで竹生島弁才天の神恩だと捉える思想にも興味深いものがあります。

続けて蓮心は、琵琶湖に「流れ」があることを指摘します。湖の流れがあるからこそ、大津や伏見の賑わいがあり、京都大坂および西国・中国・北国の人々までもが、琵琶湖の船運の便宜のお蔭で諸国の産物を自由に運送し、人力の及ぶがたい巨木や大石までも、琵琶湖から流れる淀川に浮かべて運ぶことができるのだということです。

蓮心はさらに、竹生島天女は一夜の絶間もなく湖の「智水」を下流に施すことで、京都を賑すとともに、大坂の人々に毎日の飲水を与え、日夜に利益を与えているのだとも指摘しています。近畿の流通や用水を湖流と結びつけて説明する、驚くべき近代的視点です。

2. 著者・鳩居堂蓮心と「琵琶湖愛」

著者の熊谷蓮心とは、お香や和文具などを商う京の老舗「鳩居堂」の四代目・熊谷直^{なおよす}恭（1783年～1859年）

のことです。蓮心は天保飢饉のときに私費で救い小屋を建設したり、安政コレラ流行時に救護活動を行うなど社会活動に邁進し、コレラとの闘いで絶命しました。

その蓮心が熱誠をこめて皆人に訴える「琵琶湖愛」には、心に響くものがあります。それほどの想いの背景には、蓮心のルーツが、実は近江国にあることも挙げられるでしょう。

鳩居堂初代の熊谷直心（1639年～1731年）は竹生島に仮住まいしたのち京都に出て、薬種商を始めたと伝えます。蓮心は祖先への感謝とともに琵琶湖への愛を抱き、その思いを発信しようとしたのではないのでしょうか。なお蓮心は国宝法華経序品（宝厳寺蔵）の修理もしており、文化財保護の先人でもありました。

江戸時代、京都の代表的な商人が琵琶湖への愛を抱き、あらゆる人に向けて琵琶湖への感謝を訴えていたことについて、私たちは忘れないでおきたいものです。



写真T-2 鳩居堂第四代・熊谷蓮心
(株式会社京都鳩居堂提供)

文化財保護課 井上 優